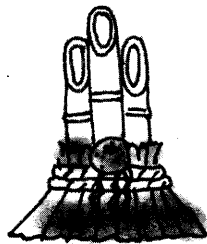


## 特集

# 子どもと新年 しあわせの記憶 わが家流お正月

すとうあさえ



## 年神様をお迎えする日

私は、一昨年の二〇〇七年に、『子どもと楽しむ行事とあそびのえほん』（すとうあさえ／文 さいとうしのぶ／絵 のら書店）を出版しました。四季折々の行事の由来と遊びを、絵本の形でまとめたものです。書くにあたり、行事について、さまざまな資料を調べ、家族を初め多くの人に取材しました。

四年という長い時間がかかりました。

この本を書き上げて、行事には、先祖たちの豊作、健康、子どもの幸せに対する「祈りや願い」が込められていると感じました。

行事の中でも、「お正月」は特に重要です。新しい年神様をお迎えして、一年間元気に生きる力をもらい、豊作を祈るという意味があるからです。

年神様は、穀物の神様で、「トシ」は「稲」のこ

と。その年の縁起のよい方角（恵方）から、いらっしやるそうです。

「門松」は、年神様が訪れるときの目印であり、「お雑煮」は、大みそかに年神様にお供えしたお餅や野菜をおろし、神と人が一緒に食べる料理のこと。「お年玉」も、年神様から魂をさずかるという意味の「年魂（としだま）」が由来だそうです。

### 子どもとお正月

私は子どものころ、お年玉と友達からの年賀状が楽しみで、大みそかは遅く寝たにもかかわらず、元旦はウキウキした気持ちで早起きしたものです。

元旦は独特な雰囲気がありました。いつもより家の中はきれいに掃除され、みんな新しい服を着て、少しかしこまって「あけましておめでとうございませう」と、あいさつをします。食卓にはすでにお正月にしか登場しないお重とお屠蘇（とそ）セット、そして家族の

干支（えと）が描かれているお箸が用意されています。お雑煮のお椀の蓋を開けると、ゆずの香りがぷーん。

高校教師だった父は、お屠蘇をいただく前に、姉と私と弟に必ずこう聞きました。

「今年の自分の目標を言いなさい」

「えー」

「わかんない」

「やだー」

などと文句を言いつつ、三人とも、結構まじめに答えていたように思います。

小学生のときは、「弟とけんかしないようにします」とか、中学生になると「部活のバレーボールでレギュラーをとります」とか、全員、目標を言い終わると、父は「がんばりなさい」と言っ、お年玉を渡してくれました。

子どものころ、毎年繰り返されていたわが家の元旦スタイルです。年神様をお迎えする日などという

ことはまったく知りませんでした、子ども心に、お正月は一年の始まりで、背筋をピンツとして迎える日、という印象がありました。

### 新年のおまじない

今ではお寺や有名な神社に初詣に行く人が多いのですが、本来は元旦に自分の住んでいる地域にある氏神様にお参りにいくことを「初詣」といいます。お正月に近所の神社に行くと、私たち子どもは、親をまねて、二拝二拍手一拝で手を合わせ、お願いごとだけは山ほどしていました。

そんないい加減さは未だにぬけず、私は五年ほど前から家族と「ワクワク恵方参り」をしています。その年の縁起のいい方向（恵方）にある神社に、初詣に行くのです。夫や息子たちと遊び感覚で始めたのですが、何となくいいことがあるような気がして「ワクワク」。新年のおまじないです。

もう一つ、「初夢」のおまじないも楽しいです。初夢は新年になって初めて見る夢のことです。昔、夢は神様のお告げだという考えがあり、内容によって一年の吉凶を占ったそうです。いい夢は、お馴染み「一富士、二鷹、三茄子」。富士山は日本一高い山。鷹は「高い」に重ねて、「高い志を貫く」という意味があり、茄子は「事をなす」に通じるとか。よい夢を見るおまじないとして、「宝船」の絵か、悪い夢を食べてくれる「バク」の絵を枕の下に入れて眠るといいそうです。

息子たちが小さかったころ、宝船の絵は難しいので、バクの絵を描いて枕の下に入れてあげました。バクの力のおかげでしょうか。悪い初夢を見たという話は聞いたことはありません。もともと「何の夢を見たか覚えていない」という年がほとんどだったような気がします。

バクのおまじないの効果はわかりませんが、それ

もわが家スタイルとして、息子たちの家庭に引き継がれていったらいいなと思っています。

何といつても、しあわせのおまじないですから。

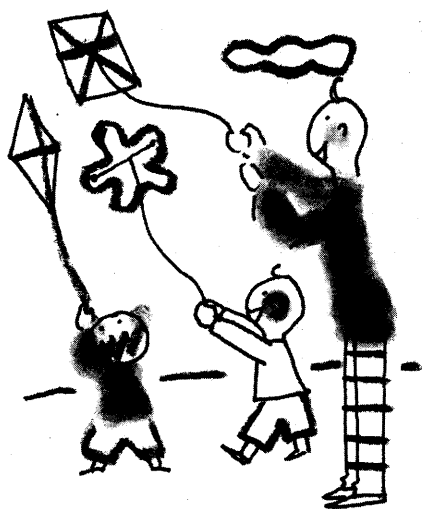
### お正月の遊び

羽根つきやカルタ、すごろく、福笑いなどは、お正月ならではの遊びです。トランプはお正月だけでなく普段でも遊びますが、カルタは、お正月にしかやりません。考えると不思議です。

子どものころ、お正月になると、家族が二つに分かれ、なぜか家の中で羽根つき大会をしました。羽根つきのルーツは、昔、小さな子どもが蚊にさされないようにというおまじないで、トンボは蚊を食べるので、ムクロジの実をトンボの頭に見たてて羽根を付けたそうです。子どもの健康への祈りから生まれた遊びで、特にお正月に限らなくてもいいと思うのですが、やはり、羽根つきもお正月が似合います。

もう一つ、お正月の遊びといえばこま。奈良時代に唐から伝わって、初めは貴族の遊びでしたが、江戸時代に大衆の遊びになりました。

私はどうもこままわしが苦手です。息子たちが、とても上手にまわしているのを見ると、うらやましくなります。ひもの巻き具合や、こまを手放すときの力の入れ具合など、子どもたちはすぐに身に付け



てしまうからすごいです。息子たちは、こまのまわし方と、たこの揚げ方を夫から教わりました。夫はどちらもとても上手で、特にたこ揚げは名人級です。多摩川でたこ揚げをしたときは、たこが川を越えてすーっと向こう岸にまで伸びていきました。通る人たちが次々に足を止めて、「すごいですね」「ちよつと糸を持たせてください」などと声をかけてくるものですから、夫はもう満面の笑み。息子たちもまるで自分が揚げているかのように得意そう。たこ揚げのコツはきつと、息子からまたその子どもたちへと家族内伝承されていくことでしょう。

新年の始まりは、ゲームやパソコンから離れて、羽根つきやこままわし、たこ揚げなど、自分の体と感覚を使って遊ぶのもいいものです。

## 七草と鏡開き

一月七日に七種類の野草の入ったお粥を食べると

一年間病気をしないという風習があります。お正月も一週間を過ぎると、何となくおなかに優しい食事が欲しくなるので、七草粥は毎年必ず食べます。

「セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ」。七草は、今ではスーパーなどで売られています。ナズナ、ハコベラ、ホトケノザなどは私の子どもたちには普通に周りに生えていました。私の友人は、七草粥の気分で、ベランダで育てているハーブの中から七種類を選んでリゾットを作るそうです。七ハーブ粥も邪気を祓<sub>はら</sub>うパワーがありそうですが、時代の流れを感じます。

新年の食べ物といえば、お餅。年神様にお供えした鏡餅をおろしてお汁粉にして食べる「鏡開き」という行事があります。

本来は一月十一日ですが、わが家では鏡餅の表面がひびわれ、底の部分がカビが生えてきそうだと判断したその日が鏡開き。一般的に、包丁を使うのは

「切る」に通じて縁起が悪いので、木槌で割ります  
が、私はこだわらずに包丁で切ってしまいます。

お汁粉に入れて食べるのはもちろん最高においしいのですが、母は時どき、あられ餅にしてくださいました。鏡餅を一センチメートル角ぐらいに砕いて、お日様に干してから、油で揚げます。油を切って、塩をばらばら振ればできあがり。そのおいしいこと。姉と弟と競って食べたのを覚えています。

### しあわせの記憶

新年は、自分の家の中も外も、町も店も、車や電車、バスまでもきれいに掃除され、近所の人に会えば「あけましておめでとうございます」と改まってあいさつを交わします。

小さな人たちも、いつもと違う空気を感じとっていると思います。家族そろって、お正月の特別な料理を食べ、お年玉をもらい、遊びを楽しみ、神社に

お参りしたり、親戚の家へ出かけたり。過ごし方は、十人十色。家庭によって違います。それが、代々継承されて家庭の色になっていくのです。七ハープ粥の家庭があってもいいし、恵方参りを遊び感覚で楽しむ家庭があってもいいのです。私がそうだったように、子どもたちはわが家流を、頭ではなく、体に染み込ませていくのだと思います。

元旦の食卓の景色、父の質問、部屋での羽根つき大会、あられ餅……、それらは、両親からもらった私の五感に刻まれているしあわせの記憶です。最近思うのですが、私が行事を継承していく原動力は、この「しあわせの記憶」にあるのかもしれない。

新しい一年の健康と平和を祈りつつ、この地球上に生きるすべての小さな人たち一人ひとりに、温かなしあわせの記憶が刻まれていきますように……。  
心から願っています。

(絵本作家)